

黒龍江省農業生産と農場経営の視察報告

ERINA調査研究部研究員 朱永浩

1. はじめに

ERINAの北東アジア食料安全保障研究プロジェクトの活動として、2008年9月2日から5日にかけて、中国黒龍江省ジャムス市、鶴崗市、ハルビン市を訪問した。訪問期間中、黒龍江省の食料クラスター形成に向けての現状と課題を探るため、三江平原に立地する「新華農場」及びハルビン市近郊の「紅旗農場」を調査した。そして、黒龍江省社会科学院・黒龍江省農業科学院・ERINA共同ワークショップにも参加してきた。

本稿では、黒龍江省農墾総局の新華農場と紅旗農場でのヒヤリング調査、ワークショップを通じての研究交流の概要を中心に、黒龍江省における農業生産・農産品加工の発展状況について報告する。

2. 黒龍江省農墾総局の概要

世界的な食糧価格の高騰が続き、人口大国の中国における食糧の需給動向が注目される中、2007年におけるイモ類を含めた国内食糧生産量は5億148万トンに達し、4年連続の豊作となった¹。しかし、急速な経済成長に合わせて穀物需要が拡大しているほか、農地減少や自然災害増加などの問題もあるため、食糧の需給バランスの確保が依然として中国にとって重要な課題となっている。

本稿で取り上げる黒龍江省は、中国の食糧生産基地の1つとして重要な位置を占めている。2006年における黒龍江

省の食糧作付面積は902.4万ヘクタール（対全国比8.6%）、食糧生産量は3,346万トン（同6.7%）であった。このうち、大豆の生産量（652万トン）は各省・直轄市の中で最大規模を誇っており、トウモロコシ（1,223万トン）は同5位、米（1,206万トン）は同7位となった²。

黒龍江省の中でも、同省の食糧作物作付面積の約1/4、食糧生産量の約1/3を占める黒龍江省農墾総局（以下、農墾総局）は、特に重要な役割を担っている。2007年末現在、農墾総局の人口は165万人、農地面積が239万ヘクタール（うち食糧作物作付面積が216.2万ヘクタール）、食糧生産量が1,246万トンとなっている³。

農墾総局は傘下に9つの分局、104の農場、7の牧場と多数の企業に加え、ラジオ局、テレビ局、新聞社、小中高校、大学、病院、検察庁、裁判所などの行政、司法と社会管理機能を有している。また、農墾総局から企業経営権が分離された結果、1998年に巨大グループ企業である「黒龍江北大荒農墾集団総公司」が設立された。その事業内容は、農林牧漁業、自動車部品、製菓、映画、電力、農機具、セメント等、多岐に亘る⁴。

3. 新華農場

新華農場の概要

9月2日、本件の共同研究者で東京大学大学院農学生命科学研究科講師の八木洋憲氏と筆者は、北京国際空港で合流し、

¹ 中国国家统计局『中国統計摘要』2008年版、120ページ。

² 中国国家统计局『中国統計年鑑』2007年版、474、478ページ。

³ 黒龍江省農墾総局統計局『黒龍江墾区統計年鑑』2008年版、43、59ページ。

⁴ 朴紅「中国国有農場における企業改革の進展と農場機能の変化 - 二九一農場を事例として」『農経論叢』Vol62、2006年、3～6ページ。



写真1 新華農場の本部

空路で黒龍江省ジャムスへ向かった。ジャムス空港への到着はフライト遅延の影響で既に深夜12時を回っていた。翌日早朝、私達はジャムス市から北に約40キロメートル離れた新華農場の視察に出かけた（写真1）。

1949年に開設され、現在農墾総局宝泉嶺分局が管轄する新華農場は、三大河川（アムール川、松花江、ウスリー川）が合流する広大な三江平原に位置している。その農場名は鶴崗市東山区新華鎮に隣接することに由来する。

2007年末現在、同農場内の人口は2万3,266人（農家戸数が8,615戸）従業員数は1万2,717人（そのうち農業従事者が9,049人）である。農場の総面積は5万5,873ヘクタール、農地面積は2万9,307ヘクタール（うち、水田面積1万1,333ヘクタール）で、主な農作物は水稲、大豆、トウモロコシ、小麦、大麦だという。2007年の穀物生産量は15万2,469トンに達し、うち水稲が9万6,267トン、大豆が8,225トンであった⁵。



写真2 新華農場の農具倉庫にあるコンバインハーベスター

元新華農場生産隊長（現在黒龍江北珠精米加工有限公司の技術顧問）の呂伝水氏の案内で、稲作農家の水田と農場の農具倉庫を視察した。農家の稲作経営規模は5～10ヘクタールが多いが、最大で約100ヘクタールの農家もあるという。そして、予想以上に田植機、コンバイン収穫機、乾燥機などの農業機械の普及率が高く、特に日本であまり使われていない大型コンバインハーベスターが数台あることに驚いた（写真2）。

黒龍江北珠精米加工有限公司

新華農場の有機稲作水田を視察した後、同農場内にある黒龍江北珠精米加工有限公司（以下、北珠精米）を見学してきた（写真3）。同社の副総経理の林均山氏（生産担当）が呂伝水氏（原料担当）とともに私達を出迎えてくれた。

呂伝水氏によれば、1997年に農墾総局と新華農場、日本のニチメン株式会社（後に日商岩井株式会社と合併して、双日株式会社となる）は、530万円を共同出資して黒龍江新綿精米加工有限公司（以下、新綿精米）を設立した。設立当時の出資比率はそれぞれ37.5%、37.5%、25%、契約期間は10年、年間生産能力は2万5,000トンであった。

新綿精米は、日本の株式会社サタケ製の大型精米ラインと株式会社安西製作所製の色彩選別機を導入して精米し、日本、韓国、香港、ロシア、シンガポール、欧州に向けて輸出を行った。そのうち、対日輸出はミニマムアクセスと売買同時契約（SBS）制度によって行われた。新綿精米は日本人の味覚に合う高品質米を輸出するために、原料の水稲を全て新華農場との契約栽培にした上、契約農家には日本人が好む「新コシヒカリ」「空育131」「上育397」等の品種を指定し、厳しい減農薬栽培を求める徹底ぶりである（写真4）。



写真3 黒龍江北珠精米加工有限公司の外観

⁵ 黒龍江省農墾総局統計局『黒龍江墾区統計年鑑』2008年版、341、375～379ページ。



写真4 黒龍江北珠精米加工有限公司の契約水田
(注)看板に「新華農場水稻科学技術模範園區」と表示されている。

そして、2008年3月の契約終了に合わせ、新綿精米は社名を「黒龍江北珠精米加工有限公司」に変更し、資本金を605万元に引き上げ、新たに10年契約を結んだ。新会社の出資比率は、鶴岡双新精米加工有限公司の65.6%、農墾総局の9.4%、双日株式会社の25%となっている。

しかし、新たな船出を迎えた同社は2008年に入ってから、世界的な食糧価格高騰に対処するための中国政府による輸出規制措置と、中国製冷凍ギョーザ中毒事件の影響による日本国内の中国産食品への不信増大を背景に、日本への輸出が完全にストップしているという。国内販売より収益率の高い対日輸出が出来なくなることは、同社にとって大きな痛手となっており、国内販売の拡大が喫緊の課題として求められることになりそうだ。

4. 紅旗農場

北大荒現代農業パーク

9月4日早朝、ジャムスから黒龍江省省都のハルビンへは高速バスで移動した。ぎっしりと満員で出発した大型バスは、高速道路を飛ばして約4時間でハルビン郊外に到着したが、ハルビン市内の渋滞に巻き込まれ、ハルビンバスステーションにたどり着くまでに約1時間半もかかった。そのため、予定していた農墾総局ハルビン分局への訪問は、1時間近く遅れてしまったが、幸いなことに、携帯電話で連絡を取りながら辛抱強く待って頂いたハルビン分局党委副書記の康文豪氏と商務局長の呉静氏は、私達を暖かく迎えてくれた。

農墾総局ハルビン分局は、ハルビン市近郊を中心に9つの農場、2つの牧場に加えて多数の関連企業を抱えている。

2007年末現在、同分局の人口は4万1,514人、そのうち2万196人が働いているという。そして、同分局の総面積は4万6,828ヘクタール、そのうち農地面積は1万7,132ヘクタールとなっている⁶。

呉静氏によれば、ハルビン分局の農地面積は、農墾総局の他の8つの分局に比べて最も小規模であるという。そのため、食糧基地と位置付けられる他分局と異なり、ハルビン分局は大都市ハルビンの郊外に立地することから、都市と調和した農業を目指しているという。具体的には、ハルビン市への有機野菜提供や、不動産開発、高付加価値の農産品加工、農業観光などに力を入れている。

今回、農墾総局ハルビン分局は、彼らが取り組んでいる都市型農業を紹介するために、北大荒現代農業パーク、紅旗農場の北大荒有機野菜基地、ハルビン大什食品有限責任会社を視察訪問先として選定した。

農墾総局ハルビン分局への訪問終了後、康文豪氏と呉静氏の案内で同分局香坊農場にある北大荒現代農業パーク(以下、農業パーク)を見学した。農業パークに到着した頃、ちょうど閉園時間になったが、私達2人のために特別に30分見せて頂くことになった。

時間がないたため、筆者らは農業パーク内の南果園(Southern Fruits Garden)と百花園(Flower Garden)を駆け足で回った。南果園ではバナナ、ヤシ、トラゴンプルーツ、ライチ、マンゴーなどの熱帯果物の樹が植えられた。百花園には、アンズリウムが大量に栽培され、綺麗に花が咲いていた(写真5)。



写真5 百花園の花弁(アンズリウム)

農業パークの責任者によれば、農業パークの総面積は

⁶ 黒龍江省農墾総局統計局『黒龍江墾区統計年鑑』2008年版、24、28ページ。

1,000ムー（66.67ヘクタール）で、うちイスラエルの技術供与により作られた温室が3.1ヘクタールに達し、黒龍江省で最大規模の温室となっている。農業パークでの観光を通じて、珍しい熱帯果物と世界各地の花卉を楽しむだけでなく、将来は新鮮で美味しい農産物（特に熱帯果物）を提供することも目指すという。

ハルビン大什食品有限責任公司

9月5日午後、呉静氏と共にハルビンハイテク産業開発区にあるハルビン大什食品有限責任公司を視察し、副総経理の高軍氏に話を伺った。

同社は農墾総局ハルビン分局の傘下企業で2004年に設立され、真空冷凍乾燥（FD）と個別瞬間冷凍（IQF）製品を生産・販売する企業である。FD製品は、イチゴ、ブルーベリー、ラズベリー、赤インゲン豆、青大豆、スイートコーン、赤タマネギ、食用菌類などがあり、IQF製品は、カリフラワー、ニンジンなどがある（写真6）。



写真6 ハルビン大什食品有限責任公司の製品展示コーナー

これらFD製品、IQF製品は、主としてアメリカ、EU、日本、韓国、オーストラリア、ロシアなどに輸出するという。売上額で見た場合、ブルーベリー、ラズベリー、イチゴのFD製品の割合が高い。

高軍氏がラズベリーを事例に、原料の仕入れ方法と生産農家への栽培技術指導の状況を説明した。また、中国製冷凍ギョーザ中毒事件の影響についても言及し、行政指導によって仕入れから出荷までに至るトレーサビリティが徹底される一方、出荷までの期間は以前に比べて約半月長くなるようになったという。

北大荒有機野菜基地

ハルビン大什食品有限責任公司の視察後、私達は紅旗農場党委書記の張曉霞氏の案内で、同農場望哈作業区にある北大荒有機野菜基地を訪問した（写真7）。



写真7 北大荒有機野菜基地の入り口

北大荒有機野菜基地は、紅旗農場が運営する実験的な農場基地である。入居者（農家）は同農場が管理する施設で野菜などを栽培・収穫するが、基地内には栽培施設と住居施設が一体的に整備されており、基地内での生活が可能である。

張曉霞氏によれば、同基地の専有面積は500ムー（33.3ヘクタール）うち第1期工事の280ムー（18.7ヘクタール）が既に完成したが、第2期工事の220ムー（14.6ヘクタール）がまだ建設中であるという（写真8）。



写真8 北大荒有機野菜基地の概観図

紅旗農場の担当者に北大荒有機野菜基地の仕組みについて確認したところ、第1期の280ムーを例に挙げて説明してくれた。

まず、紅旗農場が280ムーの農地を72ユニットに分けて関連施設を建設する。1ユニット当たりの専有面積は1,834平方メートルで、居住・作業スペース（80平方メートル）、育苗温室（128平方メートル）、2つの栽培温室（各600平方メートル）その他施設が含まれている。建設完了後、

各ユニットを分譲マンションのように入居希望者に販売する（紅旗農場の従業員が優先される）。

紅旗農場は、入居者（農家）に対して、指定した品種、育苗、栽培管理方法を求める一方、各種施設の維持管理サービスを提供する。但し、農地の所有権は農場にあるため、紅旗農場は各ユニットの入居者から毎年地代を徴収する。この地代が農場の収入源となる仕組みのようだ。

一方、入居者は農場より指定された品種、管理方法で有機野菜や果物、キノコなどを栽培・収穫し、これらをハルビン市内のスーパーマーケット等に提供（販売）する。

張曉霞氏と共にキノコの栽培温室を見学した後、私達は北大荒有機野菜基地内のぶどう園にも行って見た。ぶどう狩りに訪れる大勢の観光客で賑わっていたが、特にデラウェア種の温室は人気があるようだった（写真9、10）。



写真9 北大荒有機野菜基地のキノコ栽培温室



写真10 北大荒有機野菜基地のぶどう園

5. 黒龍江省社会科学院・黒龍江省農業科学院・ERINA 共同ワークショップ

2008年9月5日午前中、黒龍江省社会科学院の会議室において、黒龍江省社会科学院・黒龍江省農業科学院・

ERINA共同ワークショップが行われ、黒龍江省社会科学院からは曲偉院長をはじめ、笄志剛氏（東北アジア研究所 所長助理）、田宝強氏（農村発展研究所研究員）、劉小寧氏（応用経済研究所研究員）、杜穎氏（東北アジア研究所 日本研究室副主任）、張風林氏（東北アジア研究所 副研究員）、趙勤（農村発展研究所 副研究員）の7名、黒龍江省農業科学院からは矯江氏（総農芸師）1名、ERINAからは筆者と共同研究者の八木氏（東京大学）2名が参加した（写真11）。



写真11 ワークショップ終了後の記念写真

笄志剛氏がワークショップ進行役を務めた。冒頭に黒龍江省社会科学院を代表して曲偉院長が挨拶をし、そして同院の研究者らが各自の専門とする研究内容の紹介を行った後、八木氏と筆者からはERINAの北東アジア食料安全保障研究の概要及び今回の現地調査の目的について説明した。

その後、矯江氏が「黒龍江省農業（とりわけ、黒龍江省農墾総局）の概要と日本との国際交流」について報告し、北海道から黒龍江省への水稲技術支援を事例に、改革開放以降における黒龍江省農業の発展に日本が重要な役割を果たしたことを高く評価した。そして、今後の課題として、「これまで黒龍江省と日本との農業分野の交流は、主として単位面積生産量の上昇を目指すものであったが、今後の交流は高品質安定生産（特に水稲、トウモロコシ、大豆）、農業経営及びリスクマネジメントを支援するための活動に一層取り組むことが重要である」と指摘した。矯江氏の報告を受けた後、参加者による活発な質疑応答と自由討論が行われた。

6. おわりに

以上、黒龍江省への出張・調査概要について報告した。

ジャムスからハルビンへ向かう高速バスの車窓から、途切れることのない平原の景色を見て、あらためて三江平原の広さに感心し、大きな可能性を秘めていると感じた。そして、訪問調査を通じて農業生産性の向上と農業経営の効率化が図られていることがうかがえた。

一方、効率重視に偏った中国では、食の安全・安心を脅かす事件が多発する中、消費者の食の安全に対する意識、有機農作物などへの関心は確実に高まっているようだ。今後、前出の矯江氏が指摘した「現代的な農業経営を行なうため、量から質へ転換する」ことを実現するために、必要な流通知識、生産技術、経営管理能力が一層求められることになる。

なお、今回の黒龍江省での農場調査とワークショップの実施に当たっては、現地の行政機関と研究機関の理解と協力を得た。とりわけ、黒龍江省新綿精米加工有限公司総経理（元新華農場農場長）の原文成氏には、新華農場と同社での調査手配、黒龍江省農墾総局ハルビン分局党委副書記の康文豪氏には、紅旗農場とハルビン大什食品公司での調査手配、黒龍江省社会科学院東北アジア研究所所長助理の笄志剛氏にはワークショップの企画と開催に尽力して頂いた。一人一人の名前は挙げられないが、農場、工場の見学をさせて頂いた企業や農家の各位、ワークショップで報告・討論に参加頂いた黒龍江省社会科学院と黒龍江省農業科学院の諸先生にも感謝申し上げます。